

平成24年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	知的障害児の認知・運動機能の実態と支援に関する研究
------	---------------------------

研究代表者

氏名 奥住 秀之	所属 総合教育科学系 特別支援科学講座	職名 准教授
-------------	---------------------------	-----------

研究分担者

氏名 北島 善夫	所属 千葉大学教育学部	職名 教授
葉石 光一	上越教育大学	准教授

【研究成果の概要】 (文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度)

知的障害児・者（以下、知的障害児とする）は知的機能と適応行動の制約とで特徴づけられる能力障害であるが（AAIDD第11版）、種々の認知機能の障害のほか、身体運動にもまた制約が見られることは、彼らの系統的教育が始まったころから注目されている。

知的障害児の運動機能の制約は、麻痺などの顕著な運動障害がないことを考えると、運動機能それ自体というよりもむしろ、彼らの有する知的・認知機能に影響する側面が少なくない。運動文脈の理解に困難がある、文脈に応じた力を発揮することが難しいなどである。その結果、ある場面では可能な運動が別の場面で実施が難しい、簡単に見える運動が実施できず、逆に難しいとされる運動が実施できるなどのいわゆる「運動の逆説性」（ワイズマン）がある、などの特徴がよく指摘される。古典的研究によれば認知機能と運動機能は独立したものと捉えられることが多かったが、今日では、両者の連関を視野に入れたアプローチが注目されている。代表的な視点と言えるだろう。

本研究では、知的障害児の運動機能の制約を認知機能の特性と関連させつつ、それらの実態を明らかにすることを目的として行われた。研究代表者と2名の学外の研究分担者のほか、5名の知的障害児の認知・運動機能を専門とする院生等の協力を受けて実施された。

研究内容は大きく5つに分かれる。1つは動作不器用への着目である。M-ABCという発達障害を対象にした運動アセスメントと衝動型－熟慮型という認知スタイルとの関連を検討し、知的障害児の運動機能が彼らの性格特性とつながっている側面が少なくないことを指摘した。2つは抑制機能(inhibition)の影響である。抑制機能は行動や思考の調整やコントロールを行ない目標の達成を実現する能力である実行機能の重要な構成要素である。知的障害児では運動の実行のみならず、抑制（ブレーキ）の側面に障害により円滑な動作が困難である可能性を確認した。第3に視覚走査である。外界を探索して必要な事物を発見する視覚機能の障害が身体運動に関係する可能性が指摘された。またそのアセスメントとしてキャンセリングタスクの活用可能性を論じた。第4に自己肯定感（自尊感情）である。特別支援学校に在籍する児童の自己肯定感を既存の心理尺度で調べ、健常児データよりもむしろ自己肯定感が高いと読み取れる知見を得ることができ、教育実践とのかかわりの中でその要因を考察した。第5にプランニングである。どのような手順で効率よく運動するべきかのアセスメントや結果について検討した。

今後の課題としては、基礎的知見の更なる積み重ねとともに、知見の教育実践への応用が指摘された。

なお、得られた研究成果は、*Applied Neuropsychology Child*、*International Journal of Developmental Disabilities*などの国際誌、*SNE*ジャーナル、障害者スポーツ科学、*Equilibrium Research*等の国内学会誌に投稿、受理され、学術的に高い評価を得た。

研究成果発表方法

[発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入する。]

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。
なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

- 1) Hirata S, Okuzumi, H., Kitajima, Y., Hosobuchi, T, Kokubun, M (2013) Speed and accuracy of motor and cognitive control in children with intellectual disabilities. *International Journal of Developmental Disabilities*, 59. (online)
- 2) Haishi, K. Okuzumi, H. & Kokubun, M. (2013) Age-related change of the mean level and intraindividual variability of saccadic reaction time performance in persons with intellectual disabilities. *Research in Developmental Disabilities*, 34, 968-975
- 3) Ikeda, Y., Okuzumi, H., & Kokubun, M. (2012) Stroop-Like Interference in the Real Animal Size Test and the Pictorial Animal Size Test in 5- to 12-Year-Old Children and Young Adults. *Applied Neuropsychology: Child*. (online)
- 4) 奥住秀之・池田吉史・國分 充・北島善夫 (2012) 障害児放課後活動を利用する保護者における活動で重視することとその利用における困難事項. *SNE ジャーナル*, 18, 97-108.
- 5) 奥住秀之・池田吉史・平田正吾・國分 充・太田綾子 (2012) 知的障害特別支援学校高等部生徒における卒業後のスポーツ活動と属性変数. *障害者スポーツ科学*, 10, 55-61.
- 6) 奥住秀之・池田吉史・平田正吾・前田 航・國分 充・葉石光一 (2012) ファンクショナル・リーチによる健常者及び知的障害者の身体平衡機能. *Equilibrium Research*, 71, 170-175.
- 7) 奥住秀之 (2012) 知的障害者の運動機能の制約とその支援. *障害者問題研究*, 40, 10-17.
- 8) 奥住秀之・池田吉史・平田正吾・國分 充 (2012) 知的障害特別支援学校高等部生徒におけるスポーツ活動経験と属性変数との関連. *Asian Journal of Human Services*, 2, 21-28.
- 9) 奥住秀之 (2013) 知的障害児の認知・運動機能の実態と支援に関する研究. 平成 24 年度 東京学芸大学重点研究費研究成果報告書. (本研究報告書)